

分娩方法と乳幼児期における肥満のリスクについての検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮山, 千春, 森崎, 菜穂, 小川, 浩平, 田中, 久子, 東海林, 宏道, 堀川, 玲子, 左合, 治彦, 浦山, ケビン メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003992

第 10 回日本 DOHaD 学会

<一般口演 1>

分娩方法と乳幼児期における肥満のリスクについての検討

1 聖路加国際大学公衆衛生大学院、2 順天堂大学小児科、3 国立成育医療研究センター

宮山 千春

森崎菜穂 3、小川浩平 3、田中久子 3、東海林宏道 2、堀川玲子 3、左合治彦 3、浦山ケビン 1,3

【背景】小児の肥満は日本を含む世界で増加傾向であり、公衆衛生上の課題として注目されており、DOHaD の観点からも将来の生活習慣病との関連を指摘されている。分娩時の母親から児への細菌叢の暴露が将来の肥満の重要な環境因子となる可能性が示唆されており、帝王切開で出生した児は将来肥満になるリスクが高いという報告が散見されている。【目的】分娩方法と出生した児の体格との関連について検討した。また、出産後の母乳栄養の状況についても検討した。【方法】2010 年 5 月から 2013 年 11 月に成育母子コホート研究に参加した妊娠初期の女性のうち、産後の追跡調査について同意を得られた 1,277 組の母子を対象とした。分娩方法を経膈分娩と帝王切開の群に分け、出生した児の体格を BMI z-score と肥満度で評価し、これらの関連性について多変量解析を行った。この研究は所属機関の倫理委員会で承認された。【結果】全体の 28.7%が帝王切開による出生であった。分娩方法と BMI z-score との関連において、1 歳(調整後オッズ比 (aOR) 0.96, 95% 信頼区間 (CI) [0.69-1.33])、3 歳(aOR 0.94, 95% CI [0.65-1.36])、6 歳 (aOR 0.72, 95%CI [0.46-1.12]) で有意な相関関係は見られなかった。肥満度においても同様の傾向であった。感度分析においても結果に大きな変化は見られなかった。【結論】今回の研究では帝王切開で出生した児が乳幼児期の肥満の高いリスク因子であるという仮説を支持する結果は得られなかった。潜在的な関連やそのメカニズムを知るためにはさらなる研究が必要である。